

を降りるところで嚴重な目かくしをされ、建物へ入ってから目かくしを取り外されるといふ嚴重警戒ぶりであった。

あるとき、ハルピンに御成中の「宮様」が第七三一部隊にひょっこり現われたことがあった。石井四郎部隊長が「関東軍司令官の許可なくして何人も立ち入る事を禁ず」の規定を楯にとり、門前でさんざん「宮様」を待たせ、もったいをつけたあげく、施設内に案内したエピソードは関係者の間に有名である。

石井四郎隊長(軍医中將)は、生体解剖を魅力ある「実験」として、興味を持つ日本人医学者に入隊を勧誘する「餌」とした。七三一隊員でありながら、当時ハルピン医科大学などの教壇に立った教授は少なくない。

「戦後の日本医学界に数かずの難手術をこなし高名を博し、某有名国立大学の教授として政府から勲章もらいたった某氏……あの先生はなんでそれほど外科手術の技を身につけはったんや。そないな難手術、もし失敗したら、えらいこっちゃ。そうですやろ。けど、あの先生にかぎって失敗ははらへん。なんでや。前に何十回いう手

術失敗の経験を持つてはる……どこでそないに経験積まはった。みんな七三一ですわ」

関西で出会った元隊員の一人は、「丸太」を相手に難手術の「実験」が多数おこなわれたと語ってくれた。

「丸太」——それは人間であって人間ではなかった。「丸太」——一体ごとに氏名の代わりに番号を打った管理カードがあり、「丸太」が「消費」されるとその番号は新しく「入荷」した「丸太」の上につけ替えられた。

だが、第七三一部隊が生体解剖をおこなったのは、こうした「反日分子」だけではない。元隊員が当時目撃した一つの実例を書いておこう。

一九四三年のある日、解剖室に一人の中国人少年が連れこまれた。隊員らの話によると少年は「丸太」ではなく、どこかから誘拐してきたのではないかというが、正確なことはわからない。

解剖室の片隅で、少年は観念したようにじっとうずくまっていた。

解剖台の周囲を、消毒した両腕を剥き出した十数人の

隊員が白い上衣を着て立っていた。隊員の一人が、短い言葉で少年に台の上へ上がるように促した。

### 人間の「生き造り」

中国人少年は、命じられたとおりに上半身裸になり、台の上を身を横たえた。

仰向けに寝た少年の口と鼻にクロロホルムを浸した脱脂綿が押し当てられ、麻酔がかけられた。中国人少年は、これから自分の身のうえになにが起こるかを理解していなかった。

下穿きを脱がせると、少年の性器にはほとんど陰毛がなかった。大体において中国東北部の人びとは体毛が薄いのであるが、性器の形やその周辺からみて、少年の年齢は十二〜十三歳ぐらいと見当がついた。

全身に麻酔が回ったところ、中国人少年の身体がアルコールで拭き清められた。

台を囲んだ田部班員の中から、K雇員が手にメスを握って一歩少年に近寄った。胸郭に沿ってY字型にメスが

入る。コッヘル鉗子で止血された皮膚に血玉がブツブツとわき出て白い脂肪が露出した。生体解剖がはじまった。「少年はマルタやない……子どもやから別に抗日運動をやったわけではない。それを解剖したのは、健康な少年男子の臓器が欲しかったため、とあとでわかった。少年はそれだけのために生きてきたまま腑分けされたんや……」のちにこの解剖光景を回想した元七三一隊員のことばである。

眠っている少年の体内から腸、脾臓、肝臓、腎臓、胃袋と手順よく各種の臓器が取り出され、一つずつ選り分けられてはバケツの中にどさり、どさりと投げこまれた。バケツの中に放り込まれた臓器は直ちに備え付けの大きなホルマリン液の入ったガラス容器に移され、蓋が閉まった。

少年の体液にぬれてメスが光る。血泡の噴き出る中、K雇員の手ぎわよい「執刀」により、少年の下半身はほとんど空洞になった。取り出されたある臓器は、ホルマリン液の中で、びくびくと盛んな収縮運動を繰り返した。「おい、まだ生きとるやないか……」



